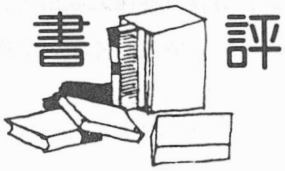
https://rodosoken.com/



江口英一監修　労働総研・全労連編

『現代の労働者階級 —「過重労働」体制下の労働と生活』

道又　健治郎

1

最近まで日本の労働者階級の全体像を把握する試みは、官庁統計を組み替えた階級・階層構成表に依拠した研究の流れが中心であり、実地調査に依拠した研究成果は残念ながら皆無に近い状態であった。この研究成果の空白を埋めたのが本書である。この大部の著作は、江口英一教授を指導者とする研究集団が、現代日本の労働者状態を解明するために全労連と労働総研の全面的協力をえて実施した4,513名のアンケート調査および代表性を配慮して選定された26職場・82名の面接記録を主たる素材として、労働者状態の解明には「労働」と「生活」の両側面からの接近を不可欠とする分析視点に立ってトータルな現状分析を試みた画期的労作である。

ここで各章のタイトルを紹介しておくと、次のとおりである。

Ⅰ　序章

Ⅱ　「過重労働体制」下の「職場」の実態

Ⅲ　「低賃金」の深まりと「生活の枠組み」の薄弱化

Ⅳ　「過重労働体制」下の「労働者生活」の危機—「労働と生活」の入りまじり

Ⅴ　さまざまな「労働と生活」の「輪」の全体的見取り図

Ⅵ　『調査』と研究が語るもの—結びにかえて

Ⅶ　23の個別事例の記録

2

以下、各章ごとに評者が気付いた主要な論点だけ簡単に紹介しておきたい。

研究の目的と方法を論じたⅠ章では、この種の先行研究が労働面に傾斜しすぎたと考える立場から「労働」のもつ規定性を認めつつも「労働と生活」の両側面から労働者状態を把握すべきとする方法論、すなわち「労働と生活」を一つの「論」として「循環」するものとして捉える注目すべき分析理論が提示されている。こうした明確な分析視点の提示と労働者階級全体に対する把握率を76.2%にまで高めた26「職場」の適切な選定こそが、本調査を成功させた鍵だったように思える。なお、本調査では「過重労働」とは、そのままでは生活破壊を短期間に必然化する労働のことを意味しているが、この「過重労働」体制の下で「労働と生活」の「循環」の「輪」を破壊に導くところの「今日的低賃金」の形成、共働きの一般化、労働と生活の入りまじり、核家族分解の危機、不安定雇用などが重要な調査課題とされている。さらに本章では、本調査をつうじて「社会的最低限」を具体的に提示する試みも表明されている。

労働時間を主たる手がかりとして職場の実態を分析したⅡ章の中でとくに注目されるのは、アンケート調査を吟味した結果えられた職場の劣悪度を指標として、交代制勤務、持ち帰り残業、長時間残業、雇用の不安定性の順に優先順

https://rodosoken.com/

位をつけて26「職場」の性格づけを行い、それによって6つの「過重労働」類型を抽出していることである。すなわち、Ⅰ－a高緊張・高密度(交代制深夜労働)、Ⅰ－b高緊張・高密度(非交代制)、Ⅱ恒常的残業型、Ⅲ定型的業務型、Ⅳ在来的生産労働、Ⅴ不安定型がそれである。Ⅲ章以下では、この過重労働類型ごとに検討が加えられており、この意味で実証分析の方向づけに決定的役割を果した章といえる。ただ、次章以下の分析で類型別考察に追われるあまり、本書の付属統計表にも表示されている職場別集計結果を充分吟味した考察が不足気味になっているのは、残念なことである。本章で試みられた年休取得にかかわる職場管理のグルーピングが示唆しているように、職場別でなければ分析を深められない問題も少なくないからである。

続くⅢ章では、「今日的低賃金」の形成と共働きの一般化、さらには社会保障の後退と新しい最低限保障の方向が論及されている。前半では、序章で提起された視点にもとづき「高搾取下の低賃金」と「高収奪下の賃金」という両側面から「今日的低賃金」の形成が解明され、労働力の価値以下への低下が論じられている。評者の卒直な感想では、資料の制約で同じく官庁統計を駆使した分析であるけれども、労働市場を媒介するところの「規定的」とされる「高搾取下の低賃金」分析よりも「生活の枠組み」を歪める「高収奪下の低賃金」分析の方がより説得的であり、あとでの展開とのつながりも深いように思える。この「今日的低賃金」は、上記の分析過程で明らかにされている社会的強制による家計負担の増大と相まって「共働きの一般化」をもたらすが、その考察の際に検討されている労働力の価値分割の今日的特徴は共働きの性格づけにとって重要な指摘である。しかし、より重要なのは、労働類型・ライフステージ別に「労働と生活のせめぎあい」を考察すると、3つにグループ分けできる生活タイプが認められる一方で、家計負担がピークに達する40才以上の世帯では、労働類型・夫の仕事内容いかんにかかわりなく妻のフルタイマー型就労が主流とならざるを得ない事実を指摘していることである。これは今日的共働きの本質に迫る示唆的な事実である。長期的生活課題に迫った後半では、国際比較の悪用を批判するとともに、「国民環元率」なる指標を発案して先進国中最低の社会保障水準を告発している。

労働者の全生活過程の分析を試みたⅣ章では、所得を得るために費した1か月の世帯単位の生活時間が3分の1を超え、労働者の殆んどが疲労を覚えるような多忙な労働生活が、生活時間全体を圧迫している状況、つまり「労働」が「生活」を規定している状況を分析している。評者が注目したのは、教師・保母などに顕著な持ち帰り残業、仕事のことから解放されてリラックスすることができない人が増えたアフター・ファイブなどに示される「労働と生活の入りまじり」、仕事優先の風潮の中で進行した地域生活の根なし草化、さらに24才以下の若者の3人に1人以上が「新聞を読まない」活字文化の衰退などの動向である。労働者の過半数が一緒に食事をとれない短い共有時間の下で家族関係の稀薄化も進んでいるが、共働き世帯でも女性労働者の強い家族志向によってどうにか維持されていると述べられている。だが、住宅・教育・老後の3大課題を抱える女性労働者には、向老期に職業継続を脅かす親の介護問題が登場するとの指摘は重要である。家族問題の分析に限っていうと、労働類型よりも配偶者の有無・男女差が大きいとの指摘箇所も多く、今後の研究が望まれる。なお、地域生活に関してはいわゆる「社宅共同体」の吟味も残された課題といえる。

https://rodosoken.com/

本書の総括部分にあたるV章とVI章では、調査結果を受けて「労働と生活」の「循環一輪」の大きさ、位置関係を「過重労働」類型別に示すシェーマ図をまず描くことによって各類型の状態に若干の差はあっても、共通の要求の下に連帯して闘い得る理論的根拠を明確化した総括的視座が提示される。このように理論仮説をシェーマ化して論点を明示し、調査結果をシェーマ化して全体像解明に迫っていく江口教授の周知の才能が遺憾なく発揮され、収入2倍程度のアップが不可欠となる最低標準生活費の算定とかかわって国民最低限の制度関連図も最後に提示されている。

なお、「今日的低賃金」をもって「『過重労働』体制の圧力」と把える立場を明らかにするとともに、共働き女子の「差別的低賃金」の中に低賃金の「一つの集約点を見出す」としているが、この指摘は重要である。そして今日的価値分割の下で創出される「特別な過剰労働力人口」が「非近代的」労働市場の仕組みゆえに価値以下の最低価格で流出を余儀なくされる主婦労働力の供給形態が理論的に追究されている。この「今日的低賃金」の下にある共働き労働者、正確には「共働き労働者階級」に労働者階級の現代的形成の姿を見ているが、ここに本書の主要な論点が集約されていると考えてよい。

3

以上のように本書は、かねてからわが国労働者状態のトータルな把握をめざしてきた江口英一教授が40数年の調査キャリアを生かして全力投球した著作だけに、先生の提起した調査仮説にしたがって集団的な調査研究が展開され、その実証的成果を先生ご自身が整序して「現代の労働者階級」像にまとめ上げている首尾一貫性に最大の魅力があるといえる。また、これまで全体的位置づけが必ずしも明確でなかった教員、保母、看護婦、ホワイトカラー系を含む労働者各層の生きた姿、その多くは共働きの「労働と生活の入りまじり」の姿を究明した点も高く評価したい。これにかわって見逃せないのは、いろいろな角度から各章で検討を加えられている現状打開に積極的になれない青年層の動向分析である。評者は、問題の重要性からしてこれを本書の重要な功績と考える。さらに、「マルクス経済学者」の一部が口にしなくなった基本命題を今日の事態に則して本格的に論証している点でも、本書刊行の意義は大きい。ただ、具体的考察の中で「労働と生活」分析のバランスが崩れ、やや「生活」分析に傾斜する傾向が認められることも指摘しておきたい。もっとも、江口教授のまとめにおいてこの種の欠陥はかなりカバーされているけれども、一応ここでふれておく。

以上の評価を前提として評者の感想を2点だけ述べておきたい。そのひとつは、民間大経営、とくに春闘相場に大きな影響力ををもつJC職場の分析が不足していることである。ふたつめは、移籍・出向・配転・応援などの資本攻勢の今日的特徴が具体的考察の中でほとんど現れてこないことである。これは、面接ケースの不足に起因するように思える。とはいえ本書は、疑いもなく他の追随を許さない社会調査集団の手になった優れた現状分析の書である。

(新日本出版社・1993年10月刊・12000円)

(札幌大学教授)